

## リレー連載生ヒストリ—温故知新

### 第 23 回 松本哲夫さん (67 期)

★同窓会にはまったく縁がなかったが、定年から数年たった年の瀬に、会社の先輩でもある真山隆夫さん (62 期) に呼び出され会社の隣の喫茶店で「俺の後任として会報の編集長をやってくれないか」と声を掛けられた。説明を聞きながらこれは大変そうだと思い、断る材料を探しながら渋る私に真山さんは「自分の思うように編集すればいいんだ。面白いぞ」と引かず、継続雇用の夜勤の時間が迫り、時間切れとなった。「分かりました。では一期だけということで」と“宣言”してお引き受けした。

★もともとパソコンは得意でなかったが、青くなるほど苦労したのはレイアウトデザインソフトの扱いだ。最初のうちは「こんなこともできるのか」とおもしろかったが、本屋で探したマニュアルは 800 ページもあり、とにかくわからないことだらけ。真山さんには 2 度ほど都内に出向いてもらい教えてもらったがそれでは追いつかず「どうしてこんな難しいソフトを採用したんですか」と食って掛かったこともあったほどだ。とりわけ大変だったのは年会費納入者一覧などの表もの。氏名など元になるデータは幹事長の倉沢裕さんに作ってもらったが、表を作るのに何日もかかり往生したのは「今となっても辛い思い出」だ。私は周りから「佐久のチベット」と言われた望月町の出身で、大都会の上田については知らないことも多く、校正の段階で厳しい指摘が相次いだことも忘れられない。

★「うえだ人」や「上田ゆかりの偉人」などの連載で取り上げる人物や、上田にまつわる話題など、新参者の編集長には知識もなく、経験や人脈の豊富な役員の方々に本当に助けられ感謝しかない。あるときゴルフ大会のスペースを用意して待っていたが、締め切り直前になっても原稿が届かず問い合わせが悪天候で中止したことが分かった。「ギャー」と叫びたい気持ちで役員の方々に助けを求めたところ高梨奉男会長がたちどころに同期の方に連絡してくれて原稿が届き、紙面の 2 段を埋め、予定通り発行できた。年末になっても新年号が届かず、やきもきしながら郵便受けの前で待ったこともあったが、3 年間無事に発行できたのは、皆さんのおかげだと感謝している。こんなことを言うと怒られるかもしれないが、何よりうれしかったのは北海道支部の会報を立ち上げた本村龍生さん (69 期) が仕事を卒業して東京に戻り、後任を引き受けてくれ、宣言通り一期で卒業できたことだ。ありがとうございました。